

2011年6月定例会の秀句鑑賞

青葉潮世界遺産の島洗ふ

守

【自句自解】

小笠原諸島が自然遺産としてユネスコの世界遺産に登録された。東日本大震災と福島原発事故に前途暗澹たる精神状況に閉じ籠っていた日本国民を、たとえ一瞬でも元気づけ鼓舞するニュースであった。「青葉潮が島を洗っている」との句の立て方によって、この清新な出来事を言祝いだものである。

先見えぬ事故原発や驟雨来る

守

【自句自解】

福島原発事故が本当に不可抗力な天変事変に該当するのか、発生と対応措置のいずれか一方、あるいは双方において人災の疑いが濃厚であるのか、専門家を交えて議論百出である。論議は別として原発事故の収束については依然として五里霧中であり、対応措置を間違えれば、より困難な事態の招来も予想されている。見通しのつかない今の状況を「驟雨来る」で比喻しようとしたものである。驟雨は止めば、この先の視界は開けるのであるが、果たして事故原発はどうなのであるか。炉内の放射性物質はあらかじめ大気中や水に既に放出されているという。

あかときの風の回廊大夏野

守

【自句自解】

大きな夏野に面した建造物に回廊が付設されており、その回廊には早朝の爽やかな風が吹きわたっている。このような鑑賞があり得ることは当然予想されるが、作者としては、具体的な建造物の一部として「回廊」が存在するのではなく、大空の一部に風の通り道が存在することを感じ取り、それを「風の回廊」と表現したものである。眼前には、風が気持ちよく吹いている夏野が大きく広がっているだけである。

伝わらぬ言葉のみこみ沙羅の花

幸

【秀句鑑賞】

良き人間関係が既に存在しているのであれば、多少苦い言葉を伝えても、その人間関係は壊れないであろう。しかしながら、まだ成熟していない人間関係においては言葉を差し控えた方が良い場合、あるいは、良き人間関係は成熟しているが相手の置かれている今の状況を考慮すると、ここで伝えるべきではない言葉もある。

はつきりと言わなくても、以心伝心で言葉が伝わることもあるが、相手方にこちらの意を汲みと

って貰えないときであって、こちらから積極的に言葉をかけられないときのもどかしさは、日常経験することである。

このようなとき作者は沙羅の花に出会った。沙羅の花はご承知のように一日花である。言葉の通じない蟠りも早く解消すればよいのにと思う。

ボール呼びネットへ蹴りて遠青嶺 貞勝

【秀句鑑賞】

サッカーをしているグラウンドのはるか向こうに青嶺が見える。俺に任せるとチームメイトから最終パスを貰い、そのボールを狙い違わずゴールマウスに入れ、ネットを揺らした達成感ないし爽快感が「遠青嶺」によく出ている。

菜食の身かるやかに更衣 貞勝

【秀句鑑賞】

夏の衣に着替えると、体型はおのずと明らかになる。そのため更衣の時期に向かって、多くの人たちは、減量に努める。しかし、残酷にも努力半ばにして更衣となる。

菜食主義者はあらかた瘦身なのであろう。減量に失敗した人たちを尻目に、夏の衣を軽やかに纏う。「後悔先に立たず」を毎年のように繰り返す身にとつて、こころ穏やかならざる一句である。

口軽きおのれ厭はず水羊羹 秀一

【秀句鑑賞】

俳句は主語を入れない限り作者本人が主人公である。しかしながら、他の事物や風景を詠む俳句と比べて、自分を詠む俳句、自分を前面に出した俳句は難しい。いたずらに自虐的になつてしまふか、反対に綺麗事の俳句、澄まし顔の俳句になつてしまふからである。

掲句にはこれらが全く感じられない。「口軽き」と「水羊羹」の取り合わせが良い。水羊羹は何でも許してしまう気がする。

女子比率高き母校よ百合の花 守

【自句自解】

記念祭の桜蔭会ブースに俳話会も出展した。最終日に撤収作業のため、母校のキャンパスを訪れた。実行委員会の放送は女子の声であり、女子の実行委員の動きが目立った。聞くところによると、最近の入学者の比率は男子35に対して女子65とのこと。旧制中学時代はともかくとして、筆者が入学した50年前の女子比率15%前後と比較しても隔世の感がある。

女子に対して百合の花は、つき過ぎであろうか。「女子生徒多き母校や合歓の花」とすることもできたが、あえて「女子比率高き」という少し硬い表現にした。

青梅の太るつもりや風重し

秀一

【秀句鑑賞】

湿気を含んだ重たい風の中、青梅が小さく揺れ、日に輝いている。水と陽を受けてどんどん大きくなって行くようだ。この青梅の有様を「青梅の太るつもり」と把握することによって、青梅の生き生きとした様子が読み手に伝わって来る。この擬人化表現は成功している。

牡丹の日光月光菩薩かな

貞勝

【秀句鑑賞】

同一種の草木が複数存在するとき、そのなかの目立つ2本に着目して「月光菩薩・日光菩薩」と形容する手法は既にあるが、作者は「牡丹」にこれを適用したのである。「牡丹」の背景に「日光月光菩薩」が存在している訳でなく、また、「日光月光菩薩」の背景に「牡丹」が存在している訳でもない。

学園祭の喧噪泰山木咲けり

友子

【秀句鑑賞】

作者にも記念祭の桜蔭会ブースに詰めていただいた。「学園祭の喧騒」と「空に向かって静かに開いている泰山木の花」との配合が効いている。漢字熟語の「喧騒」を別の柔らかな言葉に置き換えようとしても、適当な言葉がない。逆に言えば、この句では、「喧騒」という少し硬い言葉の選択が成功しているのである。

刈りし草青山となる社宅かな

秀一

【秀句鑑賞】

社宅の庭の雑草が伸びて、蚊などの害虫の温床になっている。社宅の住人総出でこれを刈り取るのはよく目にする光景であるが、作者の視線は、刈り取られて山のように積まれた草に注がれている。その結果、作者に生まれたのは「青山」（せいざん）という言葉である。「人間到る処青山あり」の青山である。社宅の庭に青山を見て取れるのは、作者の人生感の現われであり、この把握は見事の一語に尽きる。

夏燕駅舎にふんの注意書

溪水

【秀句鑑賞】

よく見かける光景である。すいすいと飛ぶ燕には会いたい、頭上から来る糞は御免蒙りたいという、人間の身勝手を詠んだものか。燕にとつて、糞は生命活動の証であり、これなくしては見

事な飛翔は見られないのであるから。

かたくなに十薬石の隙間より

佳史

【秀句鑑賞】

「かたくなに」の措辞が良い。「十薬」には色々な薬効成分が含まれていると言われるが、特定の石の隙間にこだわって伸びて来るその十薬は、とりわけ効き目があるように思える。

菩提樹のほのかな香り塔の町

ヤエ子

【添削提案】

菩提樹の花の香ほのか塔の町

菩提樹は菩提子（菩提樹の実）として秋の季語になっているが、海外詠であれば、そして、実際にその季節に花の香が町全体に感じられるのであれば、季語扱いしても良いのではないか。

放水に新緑ドドツとなだれこむ

幸

【添削提案】

ダム放水新緑ドドツとなだれこむ

ダム放水へ新緑ドドツとなだれこむ

消防ホースからの放水と間違えられないように、「ダム」を入れることにした。上五の部分は、6音あるいは7音ともなっても、「新緑がなだれこむ」の意味が判然とした方が良い。助詞の「に」は「へ」に置き換えると成功する例が多い。

梅雨晴間気分満ちきしうたた寝湯

眞三

【添削提案】

「うたた寝湯」といふ湯にあり梅雨晴間

句の眼目となる特徴的な固有名詞は、括弧の中に入れて表記すると良い。

「気分満ちきし」と言葉で敢えて言わなくても、「うたた寝湯」という固有名詞を強調することによって、そのときの作者の気分の良さが連想される。

杉木立旧宮邸に雨蛙

幸

【添削提案】

杉木立旧宮邸の雨蛙

この句は「宮邸に」を「宮邸の」に替えるだけで良い句になる。どうしても説明的になる助詞の「を」、「に」は使用を避けた方が賢明である。これによって散文化を防げる。

文責 副代表 増田 守